

・ < 研究ノート >

1 . 萩地方における各浦対抗和船競漕会の試み

萩住吉神社県社昇格記念和船競漕会（昭和8年）を中心に

高津 勝

はじめに

萩およびその周辺の漁浦は、船競漕が盛んなところであった(1)。この地方では船を漕ぐことを「おす」といい、船競漕を「おし合い」とか「おしくら」、「おしくらごう」と称した。競漕会は通例、奉納競技として祭礼時に漁浦ごとに実施されたが、まれに、各浦対抗の形式で行われることもあった。そのような事例として、明治19年5月、明治45年6月、昭和8年夏に菊ヶ浜で開催された競漕会が知られている。

越ヶ浜の富田屋が書き記した『日記帳』によれば、明治19年5月23日の「おし合」には、江崎浦、須佐浦、宇田、奈古、大井、越ヶ浜、小畑、鶴江、浜崎、玉江、三見、喜与、見島の各浦が参加した(2)。萩周辺に存在するほぼ全ての漁業集落が、この競漕に出場したことになる。『防長新聞』（明治19年5月26日）によれば、「競漕船十三艘は菊ヶ浜の向ふ手なる和島に舳舻を揃へて合図遅しと待ち掛けたる折りしも午前十一時二十分頃なりき一聲撞出す鐘の水の面に響き渡ると共に十三艘の船は各々旗を舳に樹て欸乃を謡ひつ櫓拍子高く波路を截つて漕き出てぬ互に負けるな負けじと競ひ合ふ晴れ業なれば一生懸命先になを後になり押し切りたり」。競漕船は僅か25分で菊ヶ浜に到着し、午後には、残りの12艘による競漕が繰り広げられた。海岸は朝から詰め掛けた見物人で立錐の余地もなく、「海上は一面に何浦或は何島加勢と記したる旗を揚たる各浦島の船舶が充満」していた(3)。

明治45年6月の競漕会は、萩出身の実業家・久原房之助の帰省を歓迎して開催された。父親の庄三郎は、網元や廻船問屋を営む須佐の素封家の養子となり、大阪に転じて藤田組の隆盛を支えた人物である。

明治2年に萩で生まれた房之助は、この頃、鉾山経営に成功して企業拡大の途上にあり、のちに久原財閥を形成して田中義一とも親交を保ち、政界に進出した(4)。競漕会の企画は萩町当局者が担当し、大井・小畑・東浜崎・玉江浦が出場した。「第一次の競漕を了りて、第二次に及ぶや、忽ち喧嘩紛擾、警察官の威力を以てして、容易に之を鎮定する能はず、遂に優勝旗を撤回するの已むを得ざるに至れり」。第2回目の取り組みのときに紛擾が昂じ、勝敗は無効になったのである。『萩時報』は、このときの競漕会を次のように評価している(5)。

由来漁民慄悍の氣質を以てし、咫尺を争ふの競漕場裏に於ては、這般の事実あること、寧ろ当然の次第なれども奇賓を招請して斯る無礼を敢へてせるは、其の陋劣無恥にして克己自制に乏しき、実に驚くに堪へたり。

漁民の氣質は荒々しく、強壯であり、微妙な判定をめぐってこの度のような争いが起こるのは常のことであるが、高貴な客を招待して開催する競漕会で乱闘するようなことは無礼千万であり、漁民の自制心のなさに驚かされる。識者とおぼしき上述の記事の執筆者は、そのように談じたのである。

では、昭和8年夏に開催された各浦対抗の競漕会は、どのようなものだったのか。以下、競漕会の企画立案から実施に至る過程、社会的契機と推進者、歴史的意義について考察することにしたい。

・ 萩住吉神社の県社昇格と奉納和船競漕会の提唱
昭和7年10月、萩の住吉神社が県社に昇格した。この慶事を神社関係者が総力を挙げて祝うことにな

り、翌年8月の夏の例祭に船競漕を奉納することになった。萩の地方紙『長州新聞』(昭和8年7月4日)は、この企画を次のように報じている(6)。

- ・ 7月31日、住吉神社は、萩市菊ヶ浜において、阿武郡大島・三見・奈古・大井と萩市玉江浦・越ヶ浜・鶴江・小畑の各漁浦による「昇格記念奉納和船競漕大会」を開催する。
- ・ 競漕区域は住吉神社横の海岸から疎水運河までとし、距離は約1里とする。コースについては、同区域内を一周するか、あるいは、直線コースを数回にわたって往復するか、目下、検討中である。
- ・ 出場船は赤、白、黒、青の4組に分け、「市立魚市場」が勝者に優勝旗を寄贈する。
- ・ 7月5日に住吉神社で関係者の協議会を開催する。
- ・ これを機に、この種の和船競漕を毎年開催することにする。

上述の報道内容から、競漕会の基本的な枠組みと関係者の意気込みを読み取ることができる。阿武郡と萩市の対抗という枠組みのもと、各浦が優勝を競う競技会形式の競漕で、主催は住吉神社であった。ただし、この時点では競漕のコースや方法は確定していなかった。その後、関係者による協議が進む過程で市立魚市場の積極的な関与が鮮明になり、構想は市当局者を巻き込むかたちで拡大した。7月7日の『長州新聞』は、その模様を次のように伝えている(7)。

萩市営魚市場主催で今後毎年夏期 萩市内玉江浦、鶴江、越ヶ浜、小畑浦阿武郡大井、奈古、大島、三見の各漁業組合から選手を派遣して萩市菊ヶ浜海岸に漁船漕技大会を開催する事となり市当局では左の如き萩魚市場漕技会規則を作つて本月招集の市会に提出する段取りになったが全漕技大会は全国的 著名な長崎のペーロン競漕以上の大仕掛けで開催する事となつて居る

- (一) 萩市玉江浦、越ヶ浜、鶴江、小畑浦、阿武郡三見、大島、奈古、大井各漁業組合より選手を派遣す

(二) 毎年一回催す

(三) 漕技会には審判員を設け漕技の審査に当る

(四) 優勝せる漁業組合には優勝旗を授与し一年間はこれを所持せしめ又は商品を贈る

上掲の記事から、この競漕会は次のような特徴を持つ「漁船漕技大会」として企画されていたことがわかる。

第1に、萩市営漁業組合が積極的にかかわっており、市当局も関与していること。

第2に、長期的・全国的な視野で構想しようとしていること。

第3に、各漁村における組織化と実行の主体は、伝統的な祭礼組織ではなく、漁業組合であること。

だが、住吉神社の例祭と競漕会の開催は月末に迫っており、時間的な余裕はなく、計画も荒削りで、かつ、関係者間の意思統一や市議会対策も充分ではなかった。以後、今回の昇格記念競漕会は住吉神社の主催とし、来年以降は萩市営魚市場が引き継ぐ方向で企画の具体化が図られ、7月中旬には本年度の計画の概要が定まった。その模様を7月11日の『長州新聞』は次のように報じている(8)。

- ・ 7月31日午後3時より、「萩市住吉神社主催県社昇格和船大競漕」を開催する。
- ・ コースは住吉神社裏手の菊ヶ浜海岸から阿武郡六島村羽島までの往復約1里とする(9)。
- ・ 第1組を萩市の越ヶ浜・玉江浦・鶴江・小畑浦、第2組を阿武郡奈古・大井・六島・三見の各漁業組合とする。各組合から7名の選手を派遣し、4艘の和船で2回に分けて競漕する。
- ・ 競漕用の和船は玉江浦から借用する。

以上のように、選手の人数や競漕に用いる和船の均一化を図るなど、対等平等な条件のもとで競漕を行おうとする配慮が見られ、また、7名の乗組員、往復競漕、4艘の競漕専用船に示されるように、玉江浦の経験が多く取り入れられていた。

この企画の実現にむけて、萩市内の各漁業組合と市営魚市場は積極的に対応しようとした。すなわち、「各漁業組合では組合毎に選手応援歌を作り競漕当日は統制ある応援団を組織して見事な応援振りを見

せようと云うので」「主催者側(萩市営魚市場のこと引用者)では優勝選手と全様に応援団で最も統制があつて異彩を放つたものに対して毎年等級を定めて賞品を授与する事になるであろう(10)」と。魚市場と漁業組合は、提携を強めながら準備を進めたのである。

さらに7月28日、あらたに阿武郡六島村相島漁業組合が参加することになり、参加する漁業組合の数は9組になった(11)。しかし、翌日には玉江浦が競争の激化を懸念して出場辞退を表明し、結局、8組による競漕という設定で当日を迎えた(12)。

・県社昇格記念和船競漕会の開催

住吉神社例祭は、7月30日から8月3日まで、5日間にわたって執り行われ、例祭の第2日目にあたる7月31日に奉納和船競漕が実施された。この日、参加したのは、越ヶ浜・鶴江・小畑浦・奈古・大井・六島村の相島・木与の7組であった。出場予告のあった六島村大島浦と三見浦は参加せず、相島と木与が出場した。当日、「番外競漕」が行われ、「小畑の漁夫三十余名が発動船に乗って越ヶ浜組選手の乗組んだ和船にビール瓶下駄等を投げ付け越ヶ浜の漁夫一名に負傷を負わせる事件(13)」が起こり、競漕会は「番外勝負後大もめにもめて中止のやむなきに至った(14)」。

翌8月1日、午後6時から小畑を除いた6組によって優勝を決める競漕会が行われた。前日の競漕で騒擾の一方の当事者となった越ヶ浜の選手たちは、この日の出場を拒んだが、船主たちに懇願されて漕ぐことになったのである(15)。スタート後、「エツサノの掛声勇ましく羽島付近の標識を迂回して往復二里のコースを競漕」し、大井、木与、相島、越ヶ浜、奈古、鶴江の順で到着した。1等と2等に優勝旗が、さらに1等の大井の選手には新聞社寄贈のメダルが贈られ、競漕会は終了した(16)。

初日の競漕における騒擾は主催者や選手、見物人に大きなインパクトを与えた。当時、少年であった越ヶ浜の中野金三郎は、その日の模様を次のように回顧している(17)。

私がまだ小学二年か三年生の頃、住吉神社の氏子による各地域対抗の和船競漕が行なわれた時、勝負判定をめぐる喧嘩となり、翌日再度競漕が行われた。小形の船に乗って応援に行った私達は、恐しさの余り泣いたりしたのを覚えている。その時の、もめごとは今もなお越ヶ浜で語り草として残っている。

昭和七年頃当時、国をあげて軍国思想が普及し、軍事力の拡充について私たち子供まで、アメリカ、ソ連に対しての一ぱしの軍事評論家を気どって訳もわからず論議していたのを思い出す。この思い出と若者の和船競漕の姿が、どこか一つにつながって心にひっかかるものを感じます。

・市制実施と市営魚市場の活況 昇格記念和船競漕会の社会的背景

萩住吉神社昇格記念和船競漕会が開催されるまでの経過を要約すれば、次のようになる。

第1に、昭和8年夏の各浦対抗船競漕は、住吉神社の県社昇格を記念する奉納行事として神社関係者によって発議され、企画を具体化する過程で市営魚市場関係者や近隣の漁業組合関係者の発言力が強まり、萩市当局者を巻き込む形で進行した。そうしたなか、行政の支援を背景にしたより長期的で全国的な視野に立つ構想が論議されるようになる。萩市営魚市場の指導層、彼らと密接な関係にある萩市周辺の漁業組合幹部、さらに各浦の船持ち層が、この競漕の企画・運営の主体として発言力を強めたのである。

第2に、この企画は、萩市および阿武郡内の各浦代表による対抗競漕という点に特徴があった。競漕を介して、萩市周辺漁村の地域的一体感を盛り上げようとしたのである。そのために、競漕船の規格や乗員数など、対等平等な条件のもとで公正に優勝者や順位を競うことに力点が置かれた。競技スポーツに類似した競争条件や形式を確保することが重視され、各浦で執行される祭礼と結びついた儀礼的様式や意味は不問に付され、競漕への関心は、もっぱら勝敗、とりわけ自分たちの集落が勝利することに収れんしていった。優勝旗やメダルの関心は、その証左であ

ったといえる。

第3に、出場漁村が開催直前になって変更されただけでなく、船競漕で最も著名な玉江浦が直前になって出場を辞退した。この事例は、漁村をベースにした事前の協議が充分ではなく、一部の指導者層を中心に開催準備が進められたことを示している。

それでも、前日の騒擾を乗り越え、翌日の決勝戦をやり遂げた。では、それを可能にした社会的要因とは、どのようなものだったのか。直接の要因は、住吉神社の祭神にこの行事を奉納し、県社昇格を祝おうとする関係者の熱意であった。だが、その背景には、昭和7年7月の市制実施にともなう広範な人々の高揚感があった。

すなわち、同年12月、萩港では3千トン級の汽船の接岸を可能にする改修が県の直営で始まり、人々は満州での戦火の拡大を契機に、満鮮海上交通の基地としての萩市の役割を自負するようになる(昭和12年7月、完成)。加えて、昭和8年2月に京都松江 幡生(下関)を結ぶ山陰本線が開通し、翌月には国鉄バスの防府 山口 東萩線の運行が始まった。交通上の便益の拡大は、維新の史蹟を生かした観光都市、あるいは「遊覧都市をかねた商工業都市」を建設しようとする機運を高めたのである(18)。萩市観光協会の発足(昭和8年1月)と萩史跡産業大博覧会の開催(昭和10年4月5日~5月15日)は、そうした動向を象徴する事例であったといえる(19)。

加えて、漁業界の動静も無視しえない。この頃、萩の漁業界は、市営魚市場の経営力の拡充や動力船の導入など、新たな展開期を迎えていた。しかも、昭和8年夏半期の萩近郊漁村は、遠洋漁業に従事する玉江浦、越ヶ浜、小畑浦、鶴江などを中心に、鯖の豊漁と漁価の高騰で活気づいていた(20)。そうしたなか、昇格記念和船競漕会は、動力船の船主や乗組員たちが応援にかこつけて新船の威力を誇示する場を提供した。市営魚市場や漁業組合関係者にとっては、自分たちの活力と指導力を顕示する絶好の機会になった。

なお、競漕会の開催に主導的な役割を演じた萩市営魚市場については、次のような歴史的動向を念頭に置く必要がある。すなわち、市営魚市場の前身で

ある浜崎魚市場は、藩政期以来、株を保有する10数軒の間屋が支配していたが、漁民たちは漁船建造費や漁具代などの前借りによって経済的に従属し、特約契約の拘束を受けていた。そうした状況に不満を持つ越ヶ浜の漁業者は、明治32年、漁業組合を母体に独自に越ヶ浜市場を開設し、自立化をめざした。彼らは、借財の返済をめぐる浜崎魚問屋と長期にわたる対立をへて、大正11年、念願の自主経営を実現する(21)。玉江浦の場合、大正4年2月に漁業組合が共同販売所、すなわち魚市場を開設して商業資本に委託することなく独自に販売する道を選び、大正8年2月に五周年祝賀会を開催した(22)。翌年には8万円を越す売上げを計上し、漁業組合の財政的な基盤を確立するのである(23)。

一方、魚問屋の経営する浜崎の魚市場は、明治31年に「無限責任合資会社萩魚市場」に改組し、順調な経営を展開したが、大正2年、収益の一部を町費に算入させようとする町当局との間で紛議が生じ、県の指導によって町営に移行した。しかし、町当局は魚市場を自ら経営せず、私人に請け負わせた。大正13年、阿武萩水産組合連合会(会長・佐伯宇槌、副会長・柳敬之助)が請負制度を批判して経営改革をせまり、同年10月、県当局による仲裁をへて直営方式に移行する(24)。これを機に、越ヶ浜と玉江浦の共同販売所は萩町営魚市場の支所になり、両組合が魚市場の収益の一部を交付金として受け取る方式が成立する(25)。昭和8年には魚市場に製氷所が付設され、広島・阪神地方をはじめ、名古屋・東京方面にまで鮮魚を輸送できるようになり、この年の売り上げは100万円を超えた(26)。

萩魚市場の公営化への動きは、各浦の指導的な漁業者が魚問屋資本と対峙しつつ漁業組合や共同販売所を基礎にして権益を拡大する歴史でもあった。彼らは、広範な漁民の経済的要求を背景に行政や議会を介して利害を調整し、指導的立場を築いていった。昭和8年の昇格記念和船競漕会は、彼らの能動的な関与のもと、萩市を「遊覧都市をかねた商工業都市」、満蒙と日本を結ぶ開港「基地」として発展させようとする実業界や市当局、市民層が加わることで実現したのである。

・昇格記念和船競漕会の集合的記憶

各浦対抗船競漕の企画は、単発に終わった。市当局の支援を得て長崎のペロン大会に匹敵する船競漕を萩市で定期的に行おうとした主催者側の目論見は成功せず、史蹟を生かした観光都市という、新しい萩を象徴するイベントとして発展させることはできなかった。しかも、「競争激化」を理由に参加を断った玉江浦漁民の憂慮が、現実のものになる。

継続的開催を不可能にした要因の1として、相手の競漕船に対する進路妨害や暴力沙汰、さらには、それを阻止できなかった主催者側の不手際を指摘しうる。もともと、萩や北浦地方には、船競漕のことを「おし合い」とか、「おしあいこう」、あるいは「おしくらごう」といい、船を漕いで互いに競い合うこと、競争することを好む風俗があり、船競漕に喧嘩や騒擾は付き物であった。さらに、この地方には競漕の起源を網代争いに求める伝承が多く残っており、越ヶ浜では「おしあいの勝負は喧嘩で決まる」とまでいわれていた(27)。そのことは、漁業集落において、競漕は共同体の盛衰にかかわる重要事項であり、村落の総力を賭して取り組むべきものであったことを示している。だが、そのような不文律は、当事者間、あるいは共同体の内部においてしか通用しない。共通のコードを持たない外部世界との競漕における暴力は、なによりもまず、物理的な力として処理される。しかも、中野金三郎の回顧に示されるように、各浦対抗競漕の暴力沙汰は、たんに見物人に恐怖心を植えつけただけでなく、戦時体制化が進行するなか、軍拡競争や戦争の拡大を支持する好戦的な機運を喚起した(28)。

だが、昭和8年夏の経験は、個別共同体の利害関心を超えたエネルギーを底流に宿しながらも、狭隘な共同体的心情や戦時期の好戦的気分と結びついていた。この競漕の集合的記憶は、昭和24年か25年の頃、戦後の青年団運動の高揚を背景に、萩市と阿武郡内の漁業団体が阿武湾で実施した和船競漕となって再生する(29)。昭和26年頃には、漁業会から漁業組合への改組を記念し、大井・奈古・越ヶ浜・木与・中小畑による競漕会が萩湾で開催された。戦後漁業の民主化を主導する水協法の施行と連動した動

きであった。昭和34年には、水協法施行十周年を記念して関係漁業団体による和船競漕会が開催され、玉江浦を除く北浦の各漁協の代表が萩湾で力漕した(30)。昭和8年夏の各浦対抗競漕会は、集合的な記憶となって萩周辺の各浦に継承され、漁村社会の「改革」を象徴する時代の節目に、集団的なエネルギーを結集し、表現するために断続的に再演された。そこには、物理的な暴力や騒擾の可能性を宿しながらも、それを制御して社会的なエネルギーを発揮し、漁民の集団的なアイデンティティを既存の共同社会とは異なるより解放的な空間において確認しようとする願望が伏在した。各浦対抗の競漕会が、個別集落の祭礼時に行う神事奉仕型の競漕に基礎を置きながらも、玉江浦の所有する競漕専用船の借用に示されるように、より普遍的な条件のもとで、すなわち、共通のルールに準拠する競技として試みられたことは、その証左であるといえる。留意すべきは、戦時体制への移行期であれ、戦後改革期であれ、萩周辺の漁村社会には、そうした競漕会を恒例化しえなかったことである。そのことの意味については、稿を改めて検討することにしたい。

<注>

- (1) 安富俊雄「北浦の舟競べ」(梅光女学院大学地域文化研究所(編)『地域文化研究』第7号、13~18頁)参照。
- (2) 同上、17頁による。
- (3) 「萩漁船競漕会」『防長新聞』第344号、明治19年5月26日。
- (4) 久原房之助翁伝記編纂会(編)『久原房之助』日本鉱業株式会社、1970年、参照。同書、149~152頁に須佐・萩帰郷に関する記述がある。
- (5) 「競漕会の闘争」『萩時報』第55号、明治45年6月16日。
- (6) 住吉神社祭に昇格記念和船競漕大会」『長州新聞』第5788号、昭和8年7月4日。
- (7) 「萩魚市場主催 萩地方各漁浦漁船漕技大会 近く萩市会に提案して毎年夏季に開く 相当大仕掛」『長州新聞』第5791号、昭和8年7月7

- 日。
- (8) 「和船大競漕会の大体のプラン決まる 卅一日 午後三時から住吉神社裏菊ヶ浜かあら羽島に向けて行ふ」『長州新聞』第 5794 号、昭和 8 年 7 月 11 日。
- (9) 他の記事では往復約 2 里となっている。1 里ではなく 2 里の間違いであろう。
- (10) 「和船競漕大会に各漁組応援団組織 異彩を放ち当世あるものに賞品」『長州新聞』第 5803 号、昭和 8 年 7 月 21 日。
- (11) 「住吉神社昇格記念和船競漕会 愈々来る卅一日参加数は九組」『長州新聞』第 5810 号、昭和 8 年 7 月 29 日。
- (12) 「住吉祭和船競漕 玉江浦芋をひく 競争激化を予想して」『日本太郎』昭和 8 年 7 月 30 日。ただし、清水満幸「住吉祭り考 萩市浜崎住吉神社祭礼についての分析、その 2 」『萩市郷土博物館研究報告』第 11 号、2001 年、44 頁による。
- (13) 「小畑漁夫の暴行事件 萩署で取調べ済み」『長州新聞』第 5816 号、昭和 8 年 8 月 5 日。なお、同記事には和船競漕大会が 7 月 30 日に開催されたとあるが、31 日の誤報。
- (14) 「住吉大祭第二日目余興 和船競漕番外競漕に小畑浦の某発動船の大妨害で遂に中止 事件発生と共に一日萩署では各関係者を招集して目下取調の様相」『日本太郎』昭和 8 年 8 月 2 日。ただし、清水満幸の前傾論文、31 頁による。
- (15) 秋丸政助氏とのインタビューによれば、この日、発動機船の試運転を兼ねて競漕会を見物した。小学 1 年生か 2 年生の頃で、越ヶ浜の組が速かったが、中小畑の手繰り船が何を立てて妨害し、騒動になった。越ヶ浜の若者は、翌日の競漕に出ないといったが、船主の懇願により出場した。秋丸氏は越ヶ浜在住、1920 年生まれ（2002 年 10 月 28 日、萩市にて聴き取り）。
- (16) 「和船競漕無事決勝戦を終る 大井組優勝し名誉ある優勝旗を獲得」『長州新聞』第 5814 号、昭和 8 年 8 月 3 日。
- (17) 中野金三郎「和船競漕」、山口県萩農業改良普及所（編）『海の声 海の色 萩越ヶ浜の伝承活動記録（平成五年度漁村婦人・高齢者活動促進事業）』1994 年、37-38 頁。
- (18) 萩市明治維新百年記念事業記念図書編さん委員会（編）『萩の百年』萩市役所、1968 年、347 頁、348 頁、355 頁、参照。
- (19) 萩史跡産業大博覧会事務局『市政三周年記念萩史跡産業大博覧会要覧』1929 年。および、萩市史編纂委員会（編）『萩市史』第二巻、萩市、1989 年、385～388 頁、参照。
- (20) たとえば、『長州新聞』第 5794 号（昭和 8 年 7 月 11 日）は「萩の景気は漁業部落から 豊漁続きで非常な活況 越ヶ浜の如きは副業の養蚕が繭価高で婦人の収入も破格」という記事を掲載している。
- (21) 前掲『萩市史』第二巻、231～233 頁。
- (22) 「玉江浦漁業組合共同販売所好況」『長州新聞』第 1509 号、大正 8 年 2 月 2 日。
- (23) 「玉江魚市場五周年祝賀会」『長州新聞』第 1522 号、大正 8 年 2 月 19 日。および、「玉江浦漁業総会」『長州新聞』第 2156 号、大正 10 年 1 月 13 日。
- (24) 前掲『萩市史』第二巻、233 頁、323 頁
- (25) 吉田理『萩を動かす人々』春風書房、1936 年、83 頁。
- (26) 萩市教育会（編）『萩郷土読本』1939 年、13 頁。
- (27) 前掲「和船競漕」37 頁。
- (28) ちなみに、昭和 8 年夏の競漕会に出場した選手のうち、負傷で帰還した 1 名を除き、全員が戦死した。前掲、秋丸政助インタビュー（2002 年 10 月 28 日、萩市）。
- (29) 兼本昇氏・宮内繁司氏とのインタビュー（2002 年 10 月 26 日、萩市）。兼本氏によれば、第 2 回目は越ヶ浜の漁業組合青年団が主管し、玉江浦から競漕船を借りて開催した。櫓は貸せないということで、地元の漁民から寄付を募り、予想以上に集まった。船や櫓は、越ヶ浜の船大工がボランティアで修理した。
- (30) 前掲「和船競漕」38 頁。および、前掲、秋丸政助インタビュー（2002 年 10 月 28 日、萩市）。